

犯人は誰だ (1939)

RAFFLES

メディア 映画

ジャンル サスペンス

製作国 アメリカ

色彩 B&W

時間 72分

初公開日 1955/12/05

公開情報 大映

【解説】

ハリウッドでようやく地歩を固めてきた時期のニーヴンの軽い泥棒劇。E・W・ホーナングの連作“The Amateur Cracksman”の幾つかの挿話を脚色、S・ウッドがスピーディに料理した、英国趣味溢れる小品。美術館で見学児童の陰からさっと名画“メディチ家のビーナス”が額を残して奪われる出だしの胸ときめく痛快さ（このテンポが後半のメロドラマ調に吞まれ、鈍ってしまうのは残念至極）。犯人“紳士泥棒”は、今や年金生活を送るかつての大舞台女優のもとに、“警察へ届ければ賞金が出て暮らしのたしになる”と記したメモと共にその絵を贈る。続いての彼の犯行は、拾った子猫を利用しての金庫破り。が、その後訪れたメルローズ卿のパーティで、久々に再会した親友バニーの妹グウェン（ハヴィランド）の美しさに参った“彼”＝ラッフルズは、彼女と身を固める決心をし、盗んだ宝石を愛飲の煙草の箱に入れて返す。だが、この箱に残された“ある痕跡”から、警察の目が卿とラッフルズに向けられた。そこへ、メイドに手引きされたコソ泥クローシェイが現われ、事件はややこしく展開していく……。クリケットの名手で非のうち所のない紳士という役柄は、全くニーヴンのパーソナリティに合っており、後に彼自身、同様の役をより喜劇的な形でオハコにしていく。そういう意味で、見ておいて損はないクラシックだ。

【クレジット】

監督	サム・ウッド	Sam Wood
製作	サミュエル・ゴールドウィン	Samuel Goldwyn
原作	E・W・ホーナング	E.W. Hornung
脚本	ジョン・ヴァン・ドルーテン	John van Druten
	シドニー・ハワード	Sidney Howard
撮影	グレッグ・トーランド	Gregg Toland
音楽	ヴィクター・ヤング	Victor Young
出演	デヴィッド・ニーヴン	David Niven
	オリヴィア・デ・ハヴィランド	Olivia De Havilland
	デйм・メイ・ウィッティ	Dame May Whitty
	ダドリー・ディグス	Dudley Digges
	ダグラス・ウォルトン	Douglas Walton
	E・E・クライヴ	E.E. Clive
	ライオネル・ペイプ	Lionel Pape